

聖書:テサロニケ人への手紙第一1章1~10節

説教:望みと忍耐

はじめに

この教会は、いまから16年前に札幌西福音キリスト教会の開拓伝道所としてスタートしました。集まった方々は開拓の経験はありませんし、私も卒業したばかりで右も左もわからない。始まってみると次から次と問題が降りかかってきて、今だから言えますが正直だめかもしれないと思ったこともありました。

今日からテサロニケ人への手紙をしばらく見てまいります。テサロニケ教会はパウロの手によって建てられたのですが、後で見ますが複雑な事情があつて開拓途中で町を離れなければならなかった。それでパウロが後から手紙を書き送った。簡単に言えばそんな手紙です。紙と鉛筆がまだない時代です。手紙を書くということだけでも大変ですが、当時はいまのような郵便制度はありません。相手に送ることもそれ以上大変なことでした。そんな困難があつたのにもかかわらずパウロがこの手紙を書かなければならなかったのはなぜだったのか。そして最も知りたいのは、この手紙が今の私たちとどんな関係があるのかです。そこでまず、手紙が書かれた事情から見ていくことにします。

1 テサロニケ教会（使徒17章1~16節）

テサロニケは、ギリシャにあつてエーゲ海に面した大きな港町です。7節のマケドニアは、テサロニケの町があつた地域の地名で、アカイアはマケドニアの南に広がる地域を指します。同じギリシャのコリントと呼ばれる町にいたパウロが書き送ったのがこの手紙です。

ではパウロとテサロニケはどんな関係だったのか。そのことは使徒の働きの17章1節から16節に詳しい。パウロはシラス—この手紙ではシルワノと呼ばれています—と同じ人です—とテモテの二人を連れてテサロニケを訪れ、ユダヤ人の会堂で、イエス・キリストの十字架の死と復活を宣べ伝えます。それでユダヤ人たちの幾人かと大ぜいのギリシャ人たちが信仰に入り、やがてテサロニケの町に教会が建てられていくのです。そこまでは順調だったのですが、町のユダヤ人たちがパウロに反感を抱き、フェイクニュースを流す。「パウロはローマ皇帝のほかにもイエスという別の王がいると語って民衆を惑わしている。」これを聞いて町中大騒ぎにな

り、とうとうパウロは町から脱出せざるを得なくなる。そのときシラスとテモテは残って、しばらくしてからパウロを追いかけるといふ段取りにします。パウロはコリントに向かい、二人を待っていた訳ですが、やがて無事に再会を果たし、彼らからテサロニケ教会がどうなったかを詳しく報告を受けた。それがこの手紙が書かれた事情です。

2 試練

1) 教会は開拓途上

テサロニケ教会のことで、パウロが心配していたことは二つありました。その一つ目。

パウロがテサロニケの町にいたのは、おそらく数ヶ月程度だったのではないかと思います。そんな短い時間の中で救われる人たちが起こされ、教会が形成されていくわけです。近くに模範となるクリスチャンや教会があるわけではない。きちんと教える人がいて、育てていかなければならない。そんなときに、肝心のパウロが突然町を離れなければならなくなった。幸いにしてシラスとテモテが残って指導するわけですが、それも時間は限られていました。生まれたばかりの教会はきちんと正しく信仰を保つことができるだろうか。これがパウロの一つ目の心配でした。

2) ユダヤ人からの迫害

二つ目の心配。パウロがテサロニケで福音を語ったことで町中が大騒ぎになったとき、ヤソと呼ばれるクリスチャンの家が襲われ警察に逮捕されるという事件も起きていました。そんな状態ですから、当然テサロニケ教会も襲われる可能性が十分にあつた。パウロが心配した二つ目のことはこのことでした。

彼は、自分だけ無事に逃れ、テサロニケの人たちを見捨てたという自責の念を持っていたと思います。手紙には、何度もテサロニケに戻ろうとしたということも書いています。しかしそれは許されなかった。テサロニケのことが何も見えない。それでなおさら心配が募っていきました。

3 恵み

1) 忍耐と望み

そんなパウロは、シルワノ、これはシラスのことですが、そしてテモテと再会を果たします。二人から、あの後テサロニケ教会がどのように歩んでいっ

たのか詳細な報告を聞いたとき、大きく目を開かれていきました。彼はずっとテサロニケに戻ることができないということを恥じていたけれど、テサロニケの外にいるからこそ見えてきたものがあった。いったい何が見えたか。二つあります。

一つ目は2、3節の告白に記されています。「私たちは、あなたがたのことを覚えて祈るとき、あなたがたすべてについて、いつも神に感謝しています。私たちの父である神の御前に、あなたがたの信仰から出た働きと、愛から生まれた労苦、私たちの主イエス・キリストに対する望みに支えられた忍耐を、絶えず思い起こしているからです。」

彼らはもともと偶像を拜んでいて、まことの神を知らなかった人たちです。そんな人たちが、パウロが語る福音を聞いて信仰に入りました。もし簡単な気持ちで信仰に入ったのなら、激しい迫害にあえばすぐに捨ててしまうでしょう。でもそうではない。あれほどの困難と試練の中にもありながらもテサロニケの教会が忍耐し、主イエス・キリストに対する望みを保ち続けていました。

イエスのたとえ話の中に、岩の上に蒔かれたみことばの種のたとえがあります。みことばを聞くとすぐに喜んで受け入れるけれど、自分の中に根がないので困難や試練や迫害が起こるとすぐにつまづいてしまうのだと教えます。テサロニケの人たちにあてはめるなら、彼らは岩ではなくて、彼らは三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ良い地であった、ということになります。もしパウロがテサロニケの町の中にいたなら見えたでしょうか。パウロも教会も毎日危険と背中合わせです。目の前のことしか見えなくなって、なかなか他のことは考えられない。外にいるからこそ、テサロニケの人々の信仰のすばらしさが見えてきました。

2) 他の信者の模範となった

パウロが外にいるからこそ見えてきたことの二つ目。7、8節です。「その結果、あなたがたは、マケドニアとアカイアにいるすべての信者の模範になったのです。主のことばがあなたがたのところから出て、マケドニアとアカイアに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰が、あらゆる場所に伝わっています。そのため、私たちは何も言う必要がありません。」

テサロニケ教会の人たちは、毎日迫害の危険にさらされながら信仰を守ることに精一杯ですから、まさか自分たちが他の町の信者たちの模範となっているなど思いもしなかったでしょう。むしろ、もっと福音を伝えたいと思いつつも、迫害

が怖くてなにもできない、自分は弱いだけクリスチャン。そんなふうに分かることを恥ずかしく思っていたのかもしれませんが。ところが外から見たら全然違う。何もできない。何もしていない。中に入るならそんなふうにしかならなかつたのに、実はテサロニケの人たちが多くの人たちの信仰の模範となっている。そのことがパウロの目に見える。テサロニケの外にいるからこそ見えてくる恵みでした。そのことを彼らに知らせることで励ましになればとこの手紙を書いたのです。

4 試練の中にあるとき

1) 再臨を待ち望む

では、テサロニケの人たちの信仰はどのようなものであったのか。次にそのことを確認します。9節、10節です。「人々自身が私たちのことを知らせています。私たちがどのようにあなたがたに受け入れてもらったか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを、知らせているのです。この御子こそ、神が死者の中からよみがえらせた方、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスです。」

「御子が天から来られるのを待ち望んでい

る。」ひとことと言えば再臨と呼ばれることですが、彼らはそこに重点を置いていた。なぜそこだったのか。パウロがそれしか語らなかつた訳ではありません。まんべんなく福音を語っていたはずは

テサロニケ教会がイエスの再臨を特に待ち望んでいた理由は何か。彼らはユダヤ人たちから激しい迫害を受けていました。クリスチャンとわかれば仕事を奪われたり、地域の人から差別されたり、嫌がらせを受けなければならない。そのようにして自分の居場所がなくなっていき、将来への望みがなくなればどうなるでしょう。それと反比例するように天の御国への憧れが強くなるのは自然です。

2) バランス

彼らは天の御国に憧れていた。でもこれは、きちんとバランスを保っているならばという条件がつきます。ある一部の人たちは極端に走り、明日にでも再臨があると考えてしまい、そうであるならもう働く必要はない、となってしまう。明らかにこれはバランスを欠いています。このことできち

んと指導する必要を覚えたパウロは、この手紙を書くことになりました。

3) 望みがあるから忍耐できる

私たちはいまテサロニケ教会が受けたような迫害はなかったとしても、別の意味で試練を経験します。私たちの歩むところは決して平坦とは言えない。まるで茨の連続です。目の前にあることをこなすことで精一杯です。神のためになにかしたとか、福音の拡大のために働いたという実感はほとんどないかもしれません。中には、何もできないこんな自分でよいのだろうかと心を痛めている方もおられるかも知れません。

そんな私たちはどのように歩んでいくのでしょうか。主が再臨されるのだから何もしなくてよい、と言って担うべき責任を投げ出すのか。イエスが試練と誘惑を目の前にしていったときに、自ら進んで向き合っていたように私たちも向き合い続けることとなります。それでなにか良いことが起きるのでしょうか。テサロニケ教会の信仰から教えられます。彼らは試練の中にありながらも、望みに支えられながら忍耐していきました。それが世の人々に対して大きな模範となっていきました。私たちもおなじです。

「この御子こそ、神が死者の中からよみがえらせた方、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエス。」この望みを堅く信じ、今日も明日も忍耐しつつなすべきことに誠実に向き合っていきたいと願います。